

## 第8回 森口多里のワイルド研究

大正時代のワイルド研究の特徴として多様化の傾向があげられる。アメリカ講演集を扱った大正2年(1913)6月の「アメリカ印象記」(『文章世界』第8巻第8号)やワイルドの美学をテーマにした大正3年(1914)7月の森口多里訳「装飾美術論――オスカア・ワイルド」(『仮面』第18号)がその代表とも言える。森口多里(1882-1984)は大正5年(1916)3月の「オスカア・ワイルドの美学」(『早稲田文学』第124号)、大正9年(1920)8月の『異端の画家』(日本美術学院)も発表している。

### (1) 森口多里

森口多里は、岩手出身の美術評論家で、早稲田大学英文科を卒業し、大正10年(1921)に早稲田大学建築科講師に着任した。森口はもともとは美術方面に進学しなかったのであるが、兄の反対に会い、結局は英文科に進学することとなった。早稲田大学ではかなり自由に科目を選択できる制度があり、英文科であった森口も建築科の伊東忠太、佐藤功一の指導を受けていた。<sup>(1)</sup>その後、大正12年(1923)～昭和3年(1928)までフランスに留学し、ソロボンヌ大学で中世美術を研究した。森口が英文科の出身であったこと、島村抱月の影響を受けたこと、建築科の教員となったこと、また、美術評論家となった経緯は、ワイルドの唯美主義を考えると納得のいくところである。森口が本格的にワイルドを論じたのは、フランス留学以前のことで、その後は美術論へと中心が動いている。

### (2) 「装飾美術論――オスカア・ワイルド」

大正3年(1914)7月の『仮面』(第18号)に「装飾美術論――オスカア・ワイルド」が掲載された。これは“House Decoration”の翻訳である。冒頭部分を原文、森口訳、西村訳で紹介しておきたい。

In my last lecture I gave you something of the history of Art in England I sought to trace the influence of the French Revolution upon its development. I said something of the song of Keats and the school of the pre-Raphaelites. But I do not want to shelter the movement, which I palladium however noble, or any name however revered. The roots of it have, indeed, to be sought for in things that have long passed away, and not, as some suppose, in the fancy of a few young men— although I am not altogether sure that there is anything much better than the fancy of a few young men. <sup>(2)</sup>

この前の講演に於て私は英吉利藝術史の幾部分を諸君に述べました。私はその発展の上に佛蘭西革命の影響の根を尋ねました。私はキーツの詩歌とラファエル前派に就いて多少お話いたしました。併し乍ら私は、自ら英吉利文藝復興期と呼びましたる此の運動を、どんなに高貴な守護神の下にも、またはどんなに尊敬されたる名の下にも庇護しやうとは願はない。その根元は實に遠く過ぎ去つたものの中に求められなければならぬのであつて、或る人々の想ふやうに極く少数の若年者の空想の中に求められうやうなものではありません——よしや、極く少数の若年者の空想よりも遙かに優れたる何物かあるといふことを私が大して確定しないにしろ。<sup>(3)</sup>

この前の講演でイギリスの藝術史について若干お伝えしました。その発展に対するフランス革命の影響を明らかにしようとしてきました。キーツの詩とラファエル前派についても若干お話いたしました。しかし、わたしのいわゆるイギリス文藝復興たるこの運動を、どれほどりっぱであろうといかなる守護のもとにも、もしくはどれほどあがめられえいようといかなる名のもとにも隠そうとは思いません。そのルーツは、じ

っさい、少数の若者の空想、と考える人もいますが、そうではなく、とつくの昔に過ぎ去ったもののなかに求められなければならなりません—少数の若者の空想よりもずっとよいものがあるなどとは全然考えられません。(4)

この講演については西村孝次は以下のように解説している。

‘House Decoration’——一八八二年五月十一日、ニューヨークのウォラック劇場でおこなわれ、詳しい演題は「外部並びに内部の住宅装飾への美学理論の実際的適用、および衣裳と装身具論」であった。既述のホイッスラーの「孔雀の間」の話などをまじえながら、かなり辛辣なアメリカの住宅批判を試みているが、しかし気のきいた今日ふうの装飾デザイナーよりもむしろ叩き上げた「正直な」職人の育成に力点が置かれている。(5)

講演では、ホイッスラーの「白のシンフォニー」や「孔雀の間」について触れている。なお、森口のワイルドとホイッスラーに関する論文は、大正9年(1920)8月の『異端の画家』(日本美術院)の「唯美主義の芸術家 ホッスラーとワイルド」に収載されている。

### (3) 「オスカア・ワイルドの美学」

森口多里は「オスカア・ワイルドの美学」の中で「英吉文芸復興期」(The English Renaissance of Art)、「家屋粧飾」(House Decoration)、「美術と工匠」(Art and the Handicraftsman)の講演と *The Picture of Dorian Gray* や「芸術家としての批評家」といった他の芸術作品から美に関するワイルドの思想を「新快樂主義」「技巧的官能刺戟——現実的游離美」「装飾美術」の観点から論じた。森口多里の大きな特徴は、アメリカの講演に注目し、「装飾美術論——オスカア・ワイルド」を論じ、その後「オスカア・ワイルドの美学」

として発展させたことだ。本間久雄がワイルドを「芸術と人生」の観点から論じたのに対して、森口多里はワイルドの「感美の態度」<sup>(6)</sup> そのものを論じた。

「オスカア・ワイルドの美学」についてももう少し見ておこう。

緒言

- 一 新快樂主義
- 二 技巧的官能刺戟——現實游離美
- 三 裝飾美術

「緒言」では

人の知る如くワイルドは唯美主義運動の首将であり、且つまたは該主義の代表<sup>(7)</sup>

と紹介している。さらにラスキンとペイターについては以下のように捉えている。

彼は牛津在学中はラスキン普露蓮斯美術の講義に出席して大きな感化を受け、また一方ではウォルター・ペイターからの藝術の新しい鑑賞の態度を教へられたのであつた。<sup>(8)</sup>

「一 新快樂主義」では「感美の経験は主観的なものである、従つて美は個人的である」<sup>(9)</sup> から始まっている。さらに「快感をよそにして美はあり得ない。而して官能美の要求は快樂の要求である」<sup>(10)</sup> といった記述もあり、『ドリアン・ 그레이の絵姿』を味讀しなければならぬとしている。

「二 技巧的官能刺戟——現實游離美」においても『ドリアン・ 그레이の絵姿』から引用を多用している。さらに『秘密の無いスフィンクス』、『虚偽

の類廃』、『英吉利文藝復興期』等からも積極的に引用している。個々ではペイタアトワイルドを比較して次のように述べている。

ペイタアが伊太利文藝復興の精神として、「肉體美に對する注意、即ち肉體の尊敬」と、「中世紀の宗教組織が感情及び想像を制限したるに對する反抗」とを擧げてあるが、ワイルドは拾九世紀に於ける英吉利文藝復興の精神の中に、「生體美に對する熱愛」と「形態に對する莫大なる注意」とを數へてゐる（第一一二頁）、一口に言へば「官能的」である、そして「異端的」である。<sup>(11)</sup>

「三 裝飾美術」ではワイルドの“House Decration”に詳しいと前置きしながらも、次のように述べている。

現代生活の家具、服装、裝飾品の無趣無味に耐へることもの出来なかつた彼は、恰も我々が気のきいた紳士の禮服や各種の制服に眼をそむけながらも、田園の農夫や海濱の漁夫の服装に自からなる快適の感じを認めるが如く、亞米利加西部の労働者の姿態に希臘の纏衣にも劣らぬ美を見出したのであつた。<sup>(12)</sup>

#### （４）「唯美主義の芸術家 ホヰスラーとワイルド」

「唯美主義の芸術家 ホヰスラーとワイルド」は大正 9 年(1920) 8 月の『異端の画家』（日本美術学院）と昭和 12 年(1937)12 月の『近代美術』（東京堂）に収録された論文である。二部に分かれている。前半ではまず島村抱月を踏まえ、日本への唯美主義紹介について記されている。

唯美主義（Aestheticism）のことを一番最初に精しく明瞭に日本に紹介せられた人は、たしか島村(抱月)先生であつたと思ふ。先生のおの紹介は、ウラルター・ハミルトン氏の著書を土臺として調べてものである

いふことを先生自身断つて居られる。ハミルトンの著書は、私も先生から拝借して、一度粗讀したことがあるが、唯美主義の實際的事件に就いて實に精細に記述したものであつた。<sup>(13)</sup>

そのあたとに、ワイルドの芸術觀を紹介し、ホキスラーとワイルドの芸術觀の共通点について、以下のように述べている。

ワイルドをしてホキスラーに共鳴せしめたかといふに、それはホキスラーの藝術が、第一に藝術それ自身を目的とするからであり、第二には、人生、自然、思想などいふものに頼つてゐないからであつた。<sup>(14)</sup>

ワイルドはホキスラーの「白の交響樂」を賞讚している理由について紹介している。

ワイルドがホキスラーの「白の交響樂」といふ繪を頻りに賞讚して、この繪には廣大な理智的計畫もなく、また哲理もない、単に純一孤立の色彩が正しい基調音を打つてゐるが故に、眞の藝術の喜びを吾々に感ぜしめるのである、といふ意味のことを言ふてゐる。<sup>(15)</sup>

森口が注目したのは、ワイルドが評価しているのは色調であるということだ。

全體の色調が和かな穩かな白色で統一されてゐるので、作者はこれに「白の交響樂」といふ名前をつけたのである。従つてこの繪の眞の感興は、描かれたる題材の意味には何の関係もなく、實は色調そのものゝ直接の刺戟に存在するのである。<sup>(16)</sup>

オスカー・ワイルドは、「繪畫の魅力は色彩の創造的使用にある」と言つた、それから、ホキスラーの『白の交響樂』を評して「純一孤立の色

彩が正しい基調音を打つ」と言つた。ホイスラー自身も、その作品の色調を音楽へ譬へた。<sup>(17)</sup>

なお『異端の画家』には「オスカア・ワイルドの美学」も再録されている。

森口のワイルド研究は、アメリカ講演の中の建築に関する内容に焦点が当てられたことになる。これは本間久雄が言及しているが、「芸術の生活化」ということにも繋がなる考え方としてとらえてよいだろう。森口のワイルド研究の大きな特徴は、ホイスラーを取り上げながら、ワイルドの芸術観をさらに明瞭化しようとするところであろう。

## 参考資料

佐々木隆「大正時代のワイルド受容」(『武蔵野短期大学研究紀要』武蔵野短期大学、2001年6月)

## 注

- (1) 秋山真一『近代知識人の西洋と日本』(同成社、2007年3月)、pp.15-19.
- (2) *The First Collected Edition of the Works of Oscar Wilde*.  
Misellanies, London: Dawson's of Pall Mall, 1969, p.281.
- (3) 森口多里「装飾美術論——オスカア・ワイルド」(『仮面』第18号、1914年7月)、p.114.
- (4) 西村孝次訳『オスカー・ワイルド全集』(5)(青土社、1988年12月)、p.132.
- (5) Ibid., p.574.
- (6) 森口多里「オスカア・ワイルドの美学」(『早稲田文学』第124号、1916年3月)、p.2.
- (7) Ditto.

- (8) Ibid., p.4.
- (9) Ibid., p.5/
- (10) Ibid., p.6.
- (11) Ibid., p.32.
- (12) Ibid., p.38.
- (13) 森口多里『異端の画家』（日本美術学院、1920年8月）、p.118.
- (14) Ibid., pp.120-121.
- (15) Ibid., pp.121-122
- (16) Ibid., p.120
- (17) Ibid., p.130.